

本という存在の真の意味について

土屋俊
(千葉大学)

解題

- 本に未来はあるのか
 - Yes. ただし、「本」の意味を相当にかえないといけない。
- 未来に本はあるのか。未来の本とはどのようなものか
 - 未来の本はウェブそのものである。ただし、各個人は日記をつけないといけないが、、、
- Xanaduみたいなもの？
 - まあ、そんなもので、もう少し過激か
- 結局のところ、技術決定論(マクルーハン)

なぜHighWireは尊敬されるべきか

- インターネットを利用して、成功した初めての「出版事業」
- 定義上、「出版事業」であるかはちょっと疑問である(cf. Metapress)が、学術コミュニケーションにおけるインターネットの意義を明らかにしたのは、LANLのプレプリントサーバと並んで重要
- 100万弱のフリーアクセス論文をホストしていることはたいしたことではない

なぜ日本の出版界の試みはそうでもないのか

- e-Bookなどという奇妙なものを作るのをなかなかやめない
- 1997年に創刊された出版を考える雑誌に『本とコンピュータ』というタイトルをつけたから
- なぜかやたらに著作権にうるさく、電子化に対する謂れ無き恐怖感が充満している(テキスト化に抵抗する)
- その結果、電子体の利用に対して不当に高い値段をつける

さて、目次

- 釈明：話がひどく抽象的になってしまったことのお詫び
- 知識の普及と継承の手段としての「書物」
- 「知識の普及と継承」とはそもそもどういうことなのか？
- インターネットの普及は何を変えたのか
- 「本」とはリンク集である
- WWWは「本」であり得るか？
- 「本」はWWWであり得るか？

哲学の歴史

- 20世紀の哲学は「言語哲学」である
 - ラッセル、ウイトゲンシュタイン、オースティン、クワイン、クリプキ
 - 最後の20年に「心の哲学」が再興
- これからの問題としての認識論
 - これまでの認識論は、「個人」の知識の理論
 - しかし、知識は本質的に「社会的」なもの
 - Linguistic division of labor
 - 同時発見・同時発明
 - 昨今の「知的財産」
 - この乖離への対応ができていない
 - 無知を前提とする社会運営(市場原理による価格決定、無記名投票)
 - 知識の個人所有モデルの限界
- 「本」の問題はこの脈絡で考えないといけないはず

これまでの「本」の機能

- 知識の選別
 - 本となって出版されるか否かが重要な基準
- 知識の伝達(？)・普及(空間的・時間的)
 - 伝達に本はいらない。「広める」ことが大事。
- 知識の保存
 - とっておく。物理的形態を保持する。

しかし、これらは機能の説明にすぎない。「真の意味、目的」についての議論が必要。ただし、今ある本の形態がこれらの機能を同時に実現するものであることは事実。

いくつかのコメント

- 今の本の形態は必然的なものではない
 - 印刷： 手書きの写本も産業的に存在可能だし、存在した。プリントをともなわないオンラインジャーナルは、明らかにこれからの学術情報流通の主流
 - 製本： 巻物。加除式。統合の方式は多様。
 - サイズ： 石碑だって知識を普及、保存する
- したがって、今の形態へのこだわりは真の目的の実現のためには不適切

インターネットの登場

- 歴史の復習

- 1960年代末に出現 (DARPA)
- 1980年代に研究者に普及 商業化
- 1993年アメリカ合衆国でNational Information Infrastructure構想 (通信と放送の融合)
 一般社会への普及
- 1995年以降 先進国社会への普及
- うんざりするようなキーワードの行列
 - 電子図書館、e-コマース、電子政府、
- そして、移動電話との融合

インターネットはすべてを変えた

- オープンシステム
 - 相互運用可能でないシステムは使われなくなる
 - プロトコル標準化の重要性
- オープンソース
 - 多くの人が開発に参入可能であるほうが、よりよいソフトウェアができる
- ただし、コンテンツ分野はよくわからない
 - 著作権をめぐるたたかい
 - オープンアクセスの理念(金の出所論・人類共有資産論)

例：学術コミュニケーション（300億円）

- インターネット以前
 - TULIPプロジェクト
 - JSTOR
 - 日本の「先導的電子図書館プロジェクト」
 - 当初の国立国会図書館関西館構想等々
- インターネット以後
 - 電子ジャーナル(商業出版社、学会)
 - 図書館コンソーシアム
 - 「ビッグ・ディール」

若干の洞察(1)

- プリントの時代:
 - 研究者は論文を書いて投稿
 - 編集委員会が審査して採否決定、
 - 雑誌製作(編集・印刷・製本): 学会出版者、商業出版者、大学出版会、大学、個人
 - 流通(予約代理店、取次ぎ業者、書店)
 - 読者が購読して、利用
 - 図書館が購読して、研究者に利用させ、目録・保存
 - インデクス・アブストラクトのサービス(業者)
- これらの過程を一貫して、紙の雑誌が物理的に移動する
タイトル・巻・号による同定
所有権の移転

若干の洞察(2)

- 電子ジャーナルの時代
 - インターネット上のサーバから配布
 - 所有権は移動しない(使用許諾のみ)
 - タイトルは、編集委員会の権威のラベル
 - 巻・号は無意味化
 - しかし考えてみれば、同じ号のすべての論文を通読するというようなことはなかった
- 「論文データベース」にすぎないともいえる

さらに洞察

- 紙からの解放がもたらしたもの 仲介的存在の
不要化と機能のアンバンドリングと分担見直し
 - 取次ぎが不要になった！図書館も？
 - 諸機能ごとの見直しが可能（査読・評価、編集、出版・流通、利用支援、保存）
 - 「出版者が保存をする」ようになった？！
- これまでの研究者・出版者・図書館の惰性にもかかわらず事態は進行。では「本」の場合は？

普及・頒布機能の見直し

- できるだけ多くの人に知らせたい・読ませたい
 - 頒布はインターネットで十分
 - プルメディアとプッシュメディアの併用
 - 費用負担の仕組みは別に考える
- インターネットが最良の媒体
 - 紙の本が必要とする仲介機能が不要になる
 - 著者から読者へ直接届けられる
- 紙に制約される必然性はない

保存機能の見直し

- 保存の責任は製作者側に移る
 - サーバを管理する側が保存するしかない
 - しかし、電子的資源の保存はそれなりに困難
 - 国立国会図書館のレポート
 - 技術の開発は必要だが、それだけですむ
 - 費用はおそらく安くなるはず
 - 場所をとらない
- したがって、当然、紙からの解放

選別・価値付け・評価

- インターネットでは選別がないか？ NO
 - 誰でもウェブに公開できる
 - しかし、つまらないものは見ない 選別は可能
 - すでに評価方法の試みはある
 - Goggleのレイティングなど
 - Reviewの書き込み
- これはむしろ、ウェブだからこそ可能
 - 編集者による価値付けは不要になる

結局、本が持っていた機能はウェブの諸機能が分担できる

しかし、なぜ「本」を持ってきたか

- 本の機能については、選別・普及・保存する機能は、紙にこだわるものではない
- 内容については、どうか？
 - 本の内容は、通常、言語
 - 文は単語がならんだもの
 - 単語とは、リストの項目のひとつとして意味を持つ(単語だけで意味があるわけではない)
- ということは、

単語1

単語2

単語3

単語4

単語5

単語6

単語7

要するに本に内容などはない

- そういえば、紙の時代にもそういう要素はたくさんあった
 - 目次
 - 脚注、巻末注
 - 索引
- さらに、
 - 引用
 - 参考文献
- そして、紙だと使いにくかったが、ウェブだと容易

紙の本は、偶然的・便宜的

- 本の本当の目的に則してみれば、ウェブのほうがより適当なはず
- しかも、もともとの本もリンクの集合体であった
- さらに、サーチエンジンによって補えるが、これもウェブにおいてのみ可能
- 今こそ、紙の本を忘れるべき

知識は定義？

- プラトンのソクラテス対話編の巧妙なレトリック
- 知識の社会的性格
 - 一人がすべてを「知る」ことはない
 - 知識は社会が担う
 - 定義的知識観の誤謬
 - すべての知識は部分的
- ウェブのほうがより適当な媒体
- 知識の本質は

人間は本当に知識を求めるのか

- われわれは怠惰である
 - 自分で調べたり、整理したりするのは嫌い
 - 自分で歩き回って調べるのも嫌い
- 一部にそれが好きな人がいる
 - 学者・知識人・報道陣・物好き
- ほとんどの人が怠惰なので、まとめたり整理したりしたものが必要
- それが「本」だった。これからもそうだろう

皮肉な結論

- われわれは、知識を求めたがらないので、本が必要である
- しかし、本はウェブそのものであるし、そのなかでリンクが混雑しているところが本のようなもの？
- 出版がどうなるかは知りません